

『拝読 浄土真宗のみ教え』

を味わう

話 奈良県吉野町・勝光寺住職
法 花岡 静人

拝読

限りなき光と寿の仏

阿弥陀如来がさとりを開く前、法蔵菩薩であつたとき、すべてのものを救うため、限りなき光と寿をそなたの仏になろうと誓われた。そして果てしない修行の末に、その願いを成就して、如来となられた。

阿弥陀とは無量をあらわす。阿弥陀如来は、その限りなき光をもって、あらゆる時代を貫き、私たちを救いとしてくださる。親鸞聖人は仰せになる。

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなはし

撮取してすてざれば

阿弥陀となづけただてまつる

たとえ私たちがその救いに背を向けようと、撮め取って捨てないと、どこまでもはたらくき続ける仏がおられる。その仏を、阿弥陀如来と申し上げるのである。

※『拝読 浄土真宗のみ教え』（A5判54頁・300円＋税）は、本願寺出版社で扱っています。お求めは注文専用フリーダイヤル 0120(464)5003まで。

夏路

娘の死に泣き叫ぶ姉

忙しかった生活がやつと落ちつき始めたころ、姪がパニック状態で電話をしてきました。何とか落ちつかせて、よく聞いてみると、その内容は「妹が自死した」というものであつたのです。

義兄や母の時は、どこかに、覚悟がありました。しかし、今度は、そのかけらも持ち合わせていませんでした。子どもがいらない私たち夫婦にとって、2人の姪はわが子のような大切な存在。特に、法要のご縁には必ずといっていいほどお参りにきていた妹は、その繊細な感性とあいまって、『将来、この子にお寺を任せられたら』とさえ思っていました。

しかし、その繊細な感性は、ガラス細工のような危うさをはらんでいました。小さい頃から、それによって苦しんでいたのです。本人も、周りも、なんとかしよう、あらゆることを試みましたが、そんなみんなのやさしさも、この子は十分すぎるほど知っていました。だからこそ、死への誘惑を押しつぶし、懸命に生きようとしてくれました。しかし、父親、そして、大好きだったおばあちゃんとの別離は、あまりに大きすぎたのです。

私たち夫婦にとって、わが子のようなもの、と言いましたが、姉にとっては、まさに「わが子」です。冷たくなった娘に頬をすり寄せながら、床をたたき、自らを打って、息をすることさえ忘れて泣き叫ぶ姉。「お母さ

剪定して

いただききました



墓地の入り口に大きなザクロの木がありますよ。このザクロは私の曾祖父が当時、近所のお祭りで買ってきた苗を植えたものなんです。五十年ほど前の話です。今では大きく成長し、毎年秋には多くの実りをもたらしてくれています。

さて、そのザクロですが、今まで一度も剪定をしたことがなく伸び放題でした。電線に枝がかかっていたので、春になる前に剪定しておくことになりました。

